第２章　ユダヤ教はいかにして 組織制度偏重に陥ったか（3）

（続き）

こうして、ユダヤ人が捕囚から帰還して300年を経たころ、その間、律法に対する 人々のそれまでの献身や従順に緩みの出たことが明らかになる。人々の宗教生活が時を追って組織制度偏重になりつつあるのは明白だった。奇妙に思えるやもしれないが、ファリサイ派の人たちが現われたのはこうした傾向を食い止めるためだった。彼らが明確な一派として初めて言及されるのはヨハネス・ヒルカヌス（John Hyrcanus）[7] の治世下でだが、ファリサイというその名の意味する字義的意味合いは「分離された者たち（the separated）」ということである。彼らが気づいたのは、庶民の信仰が底の浅い、上辺ばかりのものであることだった。神の律法が庶民の間でしかるべき崇敬の思いをもって保持されておらず、本来あるべき仕方で守られてもいなかった。それゆえ、ファリサイ派となった者たちは、「汝等 かれらの中より出で、之を離れよ」[8] との命令に従ったのである。彼らは、心からの真剣さと献身的態度をもって、レビ記に記された律法の厳格な順守に励んだ。あえて「求められるところを超えて 事を行ない（go the second mile）」[9]、そのようにして 祭礼や断食、儀式をまもることに、また安息日のしきたりを順守することに努めもした。そうすることが、彼らにとっては 神の戒めと考えられたからである。信仰に身を献げる彼らファリサイ派のこうした姿は誰の目にも明らかだったため、一般民衆に及ぼすその影響力は絶大なものとなった。

このようにして、家庭において、会堂において、また神殿において ユダヤ人の信仰が養い育てられ、それが年を重ね、世代を重ねて継続されていくことになる。ファリサイ派には、大きく言って２つの目的があった。第一に、人々が神の律法を知る者となるよう、彼らを導こうとしたこと。そして第二に、人々が〔そのようにして知った〕その律法に基づいて生きる者となるよう、彼らを導こうとしたことである。目的を２つにまとめて表わすに、これら以上に価値あるそれを述べるのは容易でなかろう。がしかし、献身的に事が始められたにもかかわらず、立派な目的をもって組織制度が設けられたにもかかわらず、また 善意から善かれと思って取り組みがなされたにもかかわらず、彼らファリサイ派の信仰的運動もまた、組織制度偏重へと陥ったのだった。

運動を 歴史的観点から見る

こうした情況を それから二千年の歴史を経た眺望の利く地点から振り返って見るとき、彼らの宗教生活の真の本質を、彼ら自身がなしえた以上に より明瞭に見ることができる。彼らは兎にも角にも 上述の二つの目的を達成せんとしていたように見えるが、しかし実際のところ、その宗教的教育の取り組みにおいて、またその宗教生活において 何が起こっていたのか、ということである。

それは 一つに、彼らは宗教体制としてのユダヤ教の保持には成功したものの、そこで個々の人間が失われたことだった。当初、ユダヤ教は手段だった。個々人が神を知るようになること、それが目的だった。しかし、年を重ねて経るなか、知らずのうちに、目的と手段が入れ替わってしまった。個々の人は目的でもなければ この上ない価値を持った対象でもなく、むしろ、目的達成のための手段となった。その務めは祭礼や断食をまもり、儀式のしきたりを順守することで、そのようにして、組織制度としてのユダヤ教の存続が確かなものにされたのである。

イエスが安息日(あんそくび)の順守をめぐって ユダヤ人の宗教指導者らと衝突したことは、このことを明確に示す例と言えよう。生まれつき目の見えない人を癒やされたとき（ヨハネ 9：1〜14）、また病気で38年間 ベトザタの池の傍(かたわ)らにいた人を癒やされたとき（同 5：1〜9）である。イエスはそのとき、彼らに激しく非難された。癒やそうと思えばそうできた日が週に6日、ほかにあったではないか、と言って。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」（マルコ 2：27）とはイエスの言われた言葉だが、それはまさに、彼ら宗教指導者たちがそのようにして 制度としての安息日の順守に心を奪われ、助けを必要としている個々人への思いに それが取って代わってしまったことを悟らせようとするものだった。こうして、彼らの宗教体制は保持されたものの、個々の人間が失われたのである。こうしたことが起こる趨勢(すうせい)は、いつの世代にも強くあるように思われる。

第二には、彼らユダヤの宗教指導層は 彼らが言うところの正統信仰の保持とその伝統の継承には成功したものの、より深い神の真理を自(みずか)らのものとしえなかったことである。彼らは、彼ら自身の伝統や正統信仰の教義はすべて真実で、真理は一つ残らず そこに含まれている、と信じるまでになっていた。こうして、伝統を超えて考える自由が否定されたのだった。もちろん、見解の相違は認められたし、それらはしばしばありもした。苛烈(かれつ)な不一致や激論についても同様である。ただ、それらは伝統の枠内でのことで、その外(そと)に出ることやそれに背くことは固く禁じられた。伝統を破ったり、これを危うくしたりする人は、「会堂から追い出され（put out of the synagogue）」た。そうされることで、追い出されたその人は永遠に断罪され、家族からも社会からも追放されることになる。かつての友人や隣人も、まるで病気持ちを避けるかのようにして、その人を疎(うと)んじた。その人を働き手として雇う人は一人もおらず、当人が商売をしていた場合、誰もその人から物を買うことをしなかった。こうして、救いが取り上げられ、家族や友人が取り去られ、生活の術(すべ)まで奪い取られたのである。このように、事を伝統の枠内に留(とど)めんとする圧力には強いものがあった。

ユダヤ人の宗教指導者たちからすれば たしかに、彼らの観点から 次のように言うかもしれない。すなわち、伝統を破るその自由とやらを 誰に対しても否定すべきでない、などと どうして言えるのか。神と共なるいのちの道は正統信仰の伝統の内に見出(みいだ)されうる、とされてきたことは真実でなかったのか。その外(そと)には罪の宣告と断罪とがある、とされてきたこともまた 間違いだったと言うのか。そうでなかったら、我々があらゆる手立てを自由に用い、人々を伝統の内に留(とど)めて、死に至る過ちから彼らを遠ざけたのは正しいことでなかったか。こうした理由から、彼らの伝統を代々 そのまま

完全に伝えること、そして それを受け入れ、それに従うことをすべての世代に求めること、それが宗教的教育の務めとされたのだった。なぜなら、そこにいのちがある、とされたからである。

そのときだった。イエスが突然、その革命的な教えを携えて 彼らのただ中に現われたのは。「昔の人々に・・・と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う」[10] と言って。実際、イエスは律法学者の一人として教えたわけではなかった。それゆえ、彼らは考えた。ここに、誰より裁かれるべき異端者がいる。我々の伝統が拠って立つ、まさにその基盤を脅かしている。このガリラヤの大工は だいたい、自分を何様だと思ってるのか。ヨセフの息子ではないか。律法の授与者のモーセより、自分のほうが偉大だとでも考えているのか。生きとし生けるどの律法学者にも増して賢いとでも言うのか。我々は歴史を通してずっと、律法の意味するところを解き明かし、今ある伝統を人々に備えてきたのだ。これこそ、何より重要な前提である！ なのに、この男は〔とんでもないことを言って〕自らを罪に定めるだけでなく、我らが民を惑わし、罪の宣告に至らせようとしている。我々は人々を、この男から救わねばならぬ！ イエスは死なねばならない。多くの国民が誑かされて失われるより、一人の人間が死ぬほうが良いではないか、と。

こうして、イエスは死に渡されたのだった。そして、ユダ人の指導者たちはそれなりに、その伝統を守り救ったとも言えよう。しかし、エズラの時から年月を経るなか、である。彼らが代々 その伝統を継承するなか、またそのようにして 正統信仰の純粋性を保つなか、彼らの気づかぬところで、ある悲劇的なことが起こった。より深い神の真理が失われたことである。組織制度偏重の宗教に見られる、もう一つの特徴だった。

そして 第三に、信仰の外的表現をまもることで、各人の従順さを見えるかたちで表わすこと。人々をそのような者たちにすることには 彼らユダヤの宗教指導者らは成功したものの、神との内的経験へと人々を適切に導くことに欠けたことだった。信仰がさして 神と人との交わりの事柄ではなくなり、祭礼をまもり、定められた時間に祈りをなし、断食の期間を順守し、そして儀式のしきたりに従うこと、それが問題とされるようになった。これら外的しきたりの根底にあって それを生み出した動機については、関心がほとんど向けられなかったのである。

ファリサイ派の人々とは イエスはたびたび衝突しているが、あるとき 次のように言われた。「『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい」（マタイ 9：13）。ホセア書 6章6節からの引用で、イエスはそう言って 彼らの無知を批判されたのだが、これに関連し、A. T. ロバートソン（A. T. Robertson）[11] が次のように述べている。「行って学びなさい（go ye and learn）」とはユダヤ教の教師がよく用いた決まり文句だが、彼ら教師たちに対し イエスが自身を教師としてこれを言われたとき、そこには 単なる言葉以上の力が生まれた。ある種、棘のような辛辣ささえ、と。[8] 実際、イエスはこう言われたのだった。「あなた方宗教指導者たちは、これまでずっと、信仰と聖書について研究してきた。なのに、それらがいかなるものか、肝心なことが分かっていない。信仰の本質はその精神にあるのに、それが全く失われてしまった。あなた方のまもる 形式としての事柄が意味あるものにされるのは、ただそれによってのみなのだ」

この頃、ユダヤ人の信仰生活は、内的に、すなわち精神的・霊的に促されてなされていたとは言いがたい。それはもはや、深い精神的な思いの現われとして自然になされたものではなく、律法の要求によって外的に強いられた結果だった。信仰における務めはただ一つ、律法の求めるところを逐一忠実に満たすことだった。外なる行ないが正しくあることに、すべてが懸かっていた。（会堂での）礼拝に欠かさず出席していれば、そして 宗教的なしきたりを守っていれば、その人は信仰的な人物と認められた。つまり、出席した礼拝の回数によって、また その他の宗教的要求をどれだけ注意深く守るかによって、当人の信仰の深さが測られたのである。これが、彼らにとっては、信仰深いということだった。

（続く）

注

1. Quoted in Edith Hamilton, "History's Great Challenge to Our Civilization," *Reader's Digest* (March, 1959): 160.

2. これは、循環的な歴史観の提唱と理解すべきものではない。聖書の歴史観は、循環的というより、むしろ直線的である。聖書の神は歴史において、御自身のゴールへと その歩を進められる。ここで言わんとしているのは ただ、次のようなことである。すなわち、その活動を組織化して行なうとき、信仰の運動とても、活力溢れる生き生きとした時期から、続く諸段階を経て、ついにはいのちのない形式主義のそれへと移行する趨勢がある、ということである。

3. Meyer Waxman, *A History of Jewish Literature from the Close of the Bible to Our Own Days* (New York: Bloch Publishing Co., Inc., 1930) I: 45.

4. H. Graetz, *History of the Jews* (Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, 1891) 337.

5. Emil Schürer, *A History of the Jewish People in the Time of Jesus Christ* (Edinburgh: T. & T. Clark, n.d.) II. II. 54.

6. Herbert Danby (ed. and trans.) *The Misnah.* (Fairlawn NJ: Oxford University Press, 1933), Aboth 1:1, 446.

7. Ibid., Sanhedrin 11:3, 400.

8. A. T. Robertson, *The Pharisees and Jesus* (New York: Charles Scribner's Sons, 1920) 114.

訳 注

(1)〔　〕書きは、訳者の補筆挿入。

(2) スペイン生まれの アメリカの哲学者、批評家、詩人。1863～1952 年。元・ハーバード大学教授。批判的実在論の代表者として活躍した。後半生は、アメリカを離れ、ヨーロッパで活動。

(3) ユダヤ人の歴史家で、ユダヤ史をユダヤ的視点から包括的に著した最初の学者の一人。1817～

1891 年。19 世紀ドイツにおけるユダヤ学の代表的学者として活躍した。

（4）ドイツのプロテスタント聖書学者。1844〜1910 年。ライプツィヒ大学、ゲッティンゲン大学等の教授を歴任。とりわけイエス時代のユダヤ民族史に通じ、その精緻な研究で知られた。

（5）口伝律法の集成「タルムード」の第一部で、本文部分。註釈のゲマラが第二部を構成。

（6）聖書の訳文は口語訳から。原著が意図して ASV（American Standard Version）の英訳を用いており、邦訳聖書では新共同訳より口語訳のそれに近いため。

（7）古代ユダヤを統治したハスモン朝の祭司王。紀元前 135〜105 年在位。版図の拡張によって知られ、当初、ファリサイ派と協調した。

（8）原文は "come ye out from among them, and be ye separate." だが、出典不記載。旧約聖書からの引用とみられる IIコリント 6：17 の一節と考えられ、AKJV（Authorized King James Version）の英文にほぼ一致。ただし、旧約における完全な一致箇所は不明。本訳文では、AKJV に合わせ、文語訳を当てた。ちなみに、口語訳では「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ」と、原著原文により近い表現になっている。いずれにせよ、旧約時代の一節と考えられるこの命令に ファリサイ派の人々は従い、自らを分離された者たちとした、というのが本文の主旨である。

（9）"go the second mile" は、マタイ 5：41 からの転用表現。邦訳聖書では、「（もし、だれかが、あなたをしいて 一マイル行かせようとするなら、その人と共に）二マイル行きなさい」と訳出されている（口語訳。新共同訳では、「だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい」）。つまり、「求められるところを超えて 事を行なう」ことであり、ここではすなわち、「規定以上に 事を行なう」ことを意味している。

（10）マタイ 5：21〜22 他。邦訳は口語訳聖書より。原著が意図して AKJV（Authorised King James Version）の英文を用いており、邦訳聖書では新共同訳より口語訳のそれに近いため。

（11）アメリカ 南部バプテストの新約聖書学者。1863〜1934 年。生涯、サザンバプテスト神学校で神学教育に携わった。多くの著書を著わし、とりわけギリシア語に精通。今なお、基本文献とされているものも少なくない。

（矢野 眞実訳）